

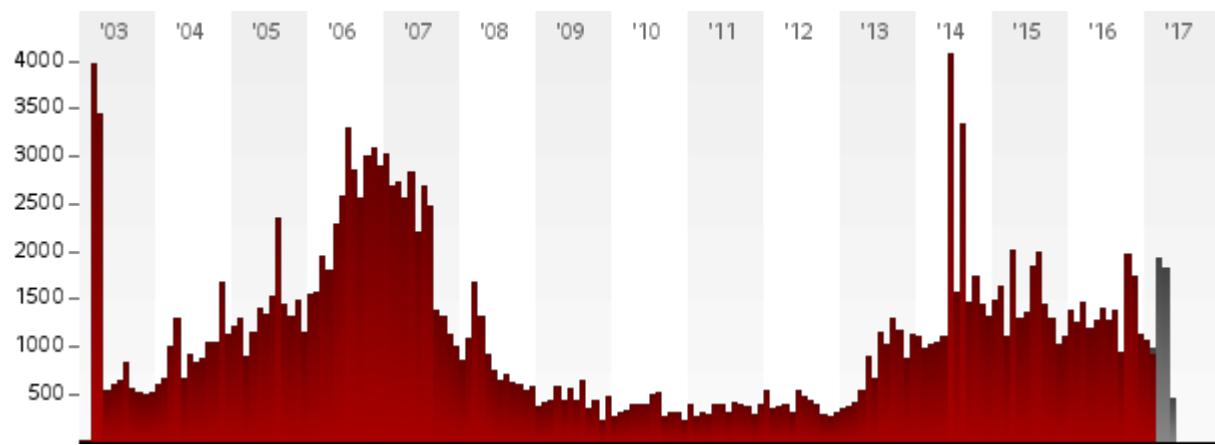
イラク小児がん、白血病支援 2016 年度報告

■ 実施地域:イラク共和国、バトラ州

■ 支援対象者:イラク共和国、通院のための交通費などを必要とする貧困家庭の小児がんの子ども

【背景】

2003 年のイラク戦争が始まってから 14 年が経ちました。しかし、イラクの治安は安定しません。2014 年 1 月に、「イスラム国」がファルージャを制圧、イラク政府軍との激しい内戦状態が続き、6 月には、モスルが陥落します。2016 年になると、イラク軍は、米軍や連合国支援を受け、対イスラム国の戦闘が本格化しイラク内の国内避難民は 300 万人を超えていきます。2016 年 10 月にはアバディ首相がモスルの解放作戦を宣言し、「イスラム国」支配地域からの解放が進んでいます。しかしながら、民間人の犠牲者は増える一方です。



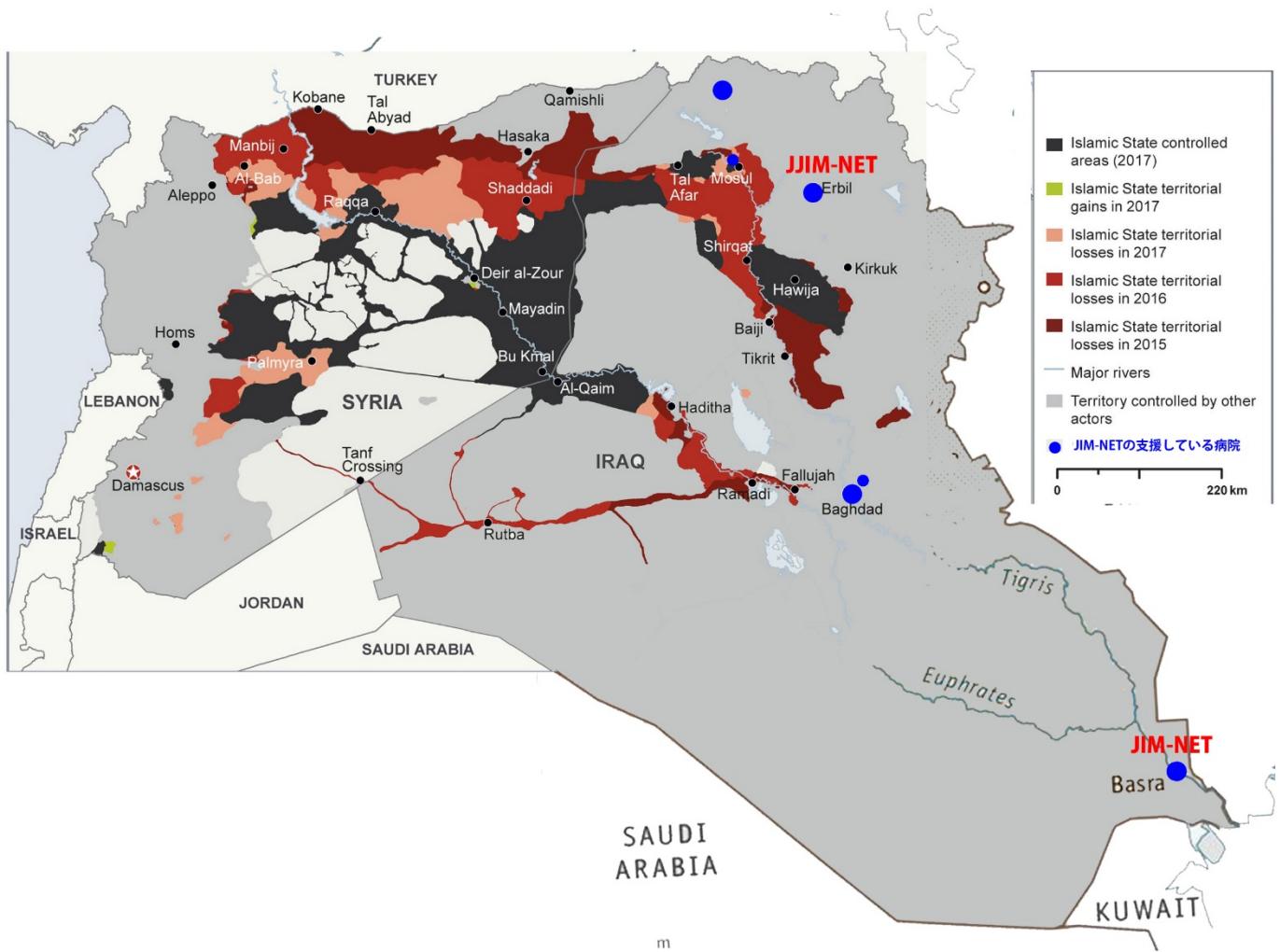
イラクによる民間人の死者数 (Iraq Body count より)

【小児がんの支援状況】

JIM-NET は一貫して、小児がんの子ども達の支援を行ってきました。首都のバグダッドの 2 病院をはじめ、バトラ、そして 2009 年からは、事務所をアルビルに移し、日本人を常駐させています。モスルの支援も行ってきましたが、2014 年からは、「イスラム国」に占領されたために連絡も途絶えていました。昨年の 10 月に解放作戦がはじまるとき、解放された地域から続々と小児がんの子ども達がアルビルの病院に来るようになりました。驚いたことに「イスラム国」に占領されていても、医師たちは、逃げることなく子ども達の治療を行っていたといいます。特に 2014 年から 2015 年までは、イラク中央政府からの給料も支払われ、薬もどうにかやりくりできていたといいます。しかし、2015 年になると状況は大きく異なり、「イスラム国」の教えが強要され、学校教育にも影響が出始め、多くの家庭では子ども達を学校には行かせず、家の中でこもりながらの生活が続いていたとのことでした。医薬品は、トルコやシリアから輸入されており、病院にない薬は患者が買わなければならなかつたようです。モスルからの避難民は、クルド自治政府管理地区の手前に避難民キャンプができて、そこで、「イスラム国」とのかかわりを調べられ問題がなければ、そこで暮らすことができます。がんの子どもたちは、許可書を出してもらい救急車でアルビル市内の病院まで来ることができます。今年の 1 月には、モスルのかつて JIM-NET が支援していたイブン・アシール病院も解放され、壊された病院の補修も始まり、避難していた人たちも戻り始めています。

さて、南端のバトラは、「イスラム国」の影響はほとんど受けておらず、ある程度治安は安定しているようです。バトラはシーア派なので、スンナ派中心のモスルの人たちが避難してくることもさほど多くないようです。しかし、モスルの戦闘に政府軍とし

て駆り出される兵士も多くいます。また、イラク全体が戦時下であることから、各病院に回される予算が少なくなり、医薬品不足は深刻になってきています。



「イスラム国」支配地域とJIM-NETの支援病院 モスル内にあるイブン・アシール病院の支援を再開。2014年からドホークにもモスルからの避難民が増えており、医薬品の支援を行っている。

【目的と成果】

バスラ小児がん患者の貧困患者

バスラでは、「イスラム国」との直接の戦闘による影響はほとんどないが、もともと貧困レベルは劣悪なために、貧困家庭の患者がきちんと治療を続けるようにサポートすることが重要である。

1. バスラこども病院に通う患者のうち、貧困家庭を選び交通費を補助。

毎月50\$ないし100\$を15-20人ほどの子どもたちに支援する。

2. 期待される効果

子どもたちが、病院に行き、決められたプロトコールを受けられることで子ども達の命が救われること

【実績】

毎月予算1000ドルとし、一人あたり50ドル—150ドルで主に、病院に来るための交通費として支援した。しかしながら、毎月予算が若干オーバー気味であり、年間の支援実績としては、合計人数で112人、総額14150ドルの支援となった。

支援対象		
父の職業	人数	金額
無職	40	4200
IDP	6	2350
日雇い	25	2150
死亡	16	2050
障害者	8	1450
軍	7	950
農業	3	450
その他	4	300
運転手	3	250
合計	112	14150

支援した患者の父親の職業を見ると無職であったり、すでに死亡しており、母親が家計を支えなければならないケースなどが多い。また、兵士として、ファルージャやモスルの戦場に送り込まれる人たちも最近は見受けられる。

16年度は、モスルからの避難民は5名を支援。アンバールからの避難民は一名

【支援した患者の例】

ナーセル・ムハンマッド君は2歳です。バスラのズベイルというところで生まれました。3人の男兄弟と2人の姉妹で暮らしています。お父さんは定職がありません。2016年の3月に白血病がわかり化学療法がはじめました。その8か月後、双子の兄のヤーセルが白血病だということがわかり、入院することになりました。病院ではベッドが足らず兄弟が同じベッドで治療を受けています。



【アブドル・ザハラさん】

アブドル・ザハラさんは、11歳のときに卵巣がんにかかりました。卵巣を取り除く手術をし、その後は、化学療法を受けていました。お父さんは、無職で8人の子どもを養っていくのは大変でした。アブドル・ザハラさんは、絵を描くのが大好きで、病院にいるときは、本当にたくさんの漫画のような絵を描いていました。2013年事務局長の佐藤がバスラを訪問したときに、アブドル・ザハラの家を訪問したことがあります。バスラの貧困地区は本当にひどく、ごみ捨て場のようなところに住んでいます。下水などのインフラが整備されておらず、ところどころ池のように下水がたまっているところがあり悪臭を放っていました。アブドル・ザハラは、当時15歳で、人見知りをするのか、絵を描いて欲しいと頼んでもそつれない態度でした。

2017年4月の終わりに、バスラからアルビルに来てもらい、チョコの缶用の絵をいくつか描いてもらうことをお願いしました。19歳になった彼女は、背も高くなっていて、とても明るい女子に成長していました。家ではほとんどふさぎ込んでいてあまり外に出ることもないようですが、お母さんも驚くほど、アルビルでは明るかったのです。そして、バスラに戻り、検査のために病院を訪れると、「病院の院内学級で先生として働きたい」といっていたそうです。JIM-NETでは、こういった小児がんを乗り越えた卒業生の貢献に期待を寄せています。



バスラのアブドル・ザハラさんが暮らす家



アルビルで行われたサッカーのチャリティイベントに顔を出すアブドル・ザハラさん



チャリティイベントのTシャツをデザインしたア卜ドルザハラさん。次はチョコのパッケージのデザインです。

【まとめ】

パルシステムから頂いたご支援のおかげで、バスラこども病院に通う小児がん患者のうちでも特に貧困家庭を支援することができました。ありがとうございました。

JIM-NET では、2017年一月より、一部は、外務省の支援をうけ、アルビルに JIM-NET ハウスと称し、遠方から病院に通う患者の宿泊施設を備えた、心理社会的支援の拠点を作りました。

バスラのローカルスタッフのイブラヒムがプロジェクトマネージャーとして月一回アルビルに来て、スタッフの指導を行っています。先日はア卜ドルザハラさんと、バスラの院内学級の教師であるマナールさんを伴い、ソーシャルワーカーたちとワークショップを行ったり、子ども達のイベントを行いました。バスラでの経験が新しい活動に活かされています。

また別件でご協力いただいているチョコ募金ですが、アルビルでもチョコ募金の活動を知ってもらおうと、日本からチョコを配ったり、ショッピングモールでチョコ募金を実際に行ったりもし始めています。今回、小児がん生存者であるア卜ドルザハラさんがパッケージの絵を担当することになりました。そちらの方も今後とも是非よろしくお願ひいたします。